

東日本大震災に関する教育的な施策（案）

明石要一（千葉大学）

I 新たな教育発想の大転換をする

- 1 16年前の阪神淡路大震災が残した教育的な遺産
 - 1) ボランティア活動が市民権を得て定着する。ボランティア・コーディネーターという言葉が生まれる。
 - 2) 兵庫県で「トライ・やる・ウイーク」が始まり、中学2年生の職場体験活動が始まる。不登校の生徒の三分の一が学校に復帰する。これが全国に普及し、キャリア教育へと進む。
- 2 10年前の大阪教育大学附属小学校の事件から「安全・安心」教育が叫ばれ、「スクールガード」「8・3運動」などが生まれる。
- 3 今回の東日本大震災からどのような教育遺産を残すか、本気で考えなければならない。
 - 1) 中・高校生のボランティア活動が見られる
 - 2) 元気が出る・勇気を持てる「言葉」の収集
 - 3) 「とっさの判断ができる」言い伝えを広める「とにかく裏山に逃げろ」「沖に出ろ」

II 被災地の子ども放課後を豊かにする

生活体験・社会体験・自然体験を豊かにする

- 1) 放課後子ども教室を充実させる
 - 一屋内（教室や体育館）の生活体験を豊かにする一
 - ・午後3時から午後7時まで学校の屋内で遊べる空間を用意する
 - ・「伝統遊び」のような遊びメニューを用意する
 - ・NPO・ボランティア等に遊びの世話を頼む一雇用促進につながる
 - ・歩数計を貸与し、一日に15000歩を動く一運動量を確保する
 - ・体育館で「挫けず、元気が出て、勇気をもらえる」名画を上映する
 - ・おやつを用意する
- 2) 夏休みや土曜日・日曜日に学校単位・子ども会単位で青少年施設に出かけキャンプなどの体験をする。また、他の地域の子どものと交流する（海彦と山彦の交流）。
- 3) 土曜・日曜日に中学生・高校生のボランティアを募り、小学生と一緒に遊んでもらう仕組みを作る。
- 4) 夏休みに短期「山村留学」をして、農業体験・漁業体験をしてもらう。
- 5) 7月と8月を東日本を中心とした体験活動月間にする。
 - ・体験活動カードを作り、夏休みのラジオ体操みたいに活動記録を残す。